

秋季大会 2023 in Shizuoka | 2023.11.08 Wed. - 11.09 Thu.

# 2030年の日本の未来を共に創る

～ 地域と共にありたい社会を実現するために ～

2023年度ファミリー会秋季大会の舞台は、初開催となる静岡県。富士山に象徴される風光明媚な自然、豊かな歴史・文化、製造業を中心とした多彩な産業など、幅広い魅力を持つ静岡での開催を通じて、多くの会員様が語り合い、課題解決に向けたヒントを持ち帰っていただく機会となりました。

## Contents 会報Family VOL.412

- 2 秋季大会 2023 in Shizuoka
- 5 秋季大会特別講演演録  
「家康が変えた日本」
- 11 Futures' Literacy  
人類の夢を乗せて膨らみ続ける  
宇宙ビジネスのビッグバン前夜を探訪
- 16 Family's Information
- 17 Family's Event Picks
  - ・ [Fujitsu Kozuchi (code name)  
- Fujitsu AI Platform] のご紹介
  - ・ 集合型ワークショップ  
「情報交換会」&交流イベント
  - ・ 人材育成や地域コミュニティについて  
考え、一歩踏み出すきっかけに

## 富士通を含めた会員企業同士が、共に考え、共に未来を目指す機会に

新型コロナウイルス感染症が5類に引き下げとなり、ようやくリアルでの人の集まりも可能になりました。とはいえ、コロナ以前の生活に戻ったわけではなく、企業が直面する課題はより多様化・複雑化し、個々の企業だけで解決するのは困難な時代を迎えています。

FUJITSUファミリー会の目的は、会員企業と富士通が共に考え、研究や討議、実践を通じて、お互いの利益増進を目指すことにあります。さらにその先には、会員企業や富士通が拠点を置く地域社会、ひいては日本社会の成長・発展に寄与することを目指しています。

こうしたファミリー会の意義を再確認すべく、今年の大会のテーマは「2030年の日本の未来を共に創る」、そしてサブタイトルは「地域と共にありたい社会を実現するために」としました。

来たる2030年に向けて、会員相互の交流を通して、共に取り組むべき課題解決のヒントとなる有益な情報を持ち帰っていただけるよう、多彩なプログラムを用意しました。参加者が得た知見や気づきを、誌面を通じて皆様にも共有いただければ幸いです。

会場：静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」

## 開会挨拶



FUJITSUファミリー会 会長  
第一生命情報システム  
株式会社  
代表取締役社長  
**佐藤 智**

## 来賓挨拶



静岡県 副知事  
**出野 勉** 氏

## 基調講演



富士通株式会社  
執行役員 SEVP  
グローバルビジネス  
ソリューション  
ビジネスグループ長  
**高橋 美波**

## デモンストレーション



富士通株式会社  
グローバルビジネス  
ソリューション  
BG シニアマネージャー  
**平谷 真智子** /  
ソーシャルソリューション  
事業本部  
シニアマネージャー  
**秋野 陽太郎**

## 富士通挨拶



富士通株式会社  
代表取締役社長 CEO  
**時田 隆仁**

## 総合司会



会報担当理事  
**大林 孝至**

## サステナブルな社会の実現に向けて

基調講演の冒頭では、富士通が今後10年間の重要テーマと捉えているサステナビリティ・トランスフォーメーション(以下SX)についての解説がありました。SXとは、地球規模の気候変動や災害・紛争によるサプライチェーンの分断など、複雑化する社会課題をテクノロジーによるイノベーションを通じて解決し、社会をより持続可能なものにしていくこと。一方で、グローバルリーダーの中では「サステナビリティは新たなビジネス機会」と捉える声も多く、SXへの取り組みは、日本企業がグローバル市場での価値を高めていくチャンスでもあります。

こうした認識のもと、2021年10月に立ち上げられたのが、サステナブルな社会の実現を目指す富士通の新事業ブランド「Fujitsu Uvance(ユーバンス)」です。SXで取り組む課題は、1社の力だけで解決できないものが多く、クロスインダストリーでの取り組みが欠かせません。富士通はFujitsu Uvanceを通じて、自ら培ってきた技術やノウハウとお客様の知見を統合し、社会課題解決につながるサービスソリューションに育てていきます。その具体例として、

「デジタルリハーサルによるCO<sub>2</sub>排出削減」「ブロックチェーンを駆使したトレーサビリティ確保による責任あるサプライチェーンの実現」「気象データと連動した需要予測によるフードロス削減」など、様々な事例を紹介。そのうち代表的な2事例についてデモが行われ、来場者から感嘆の声が上がっていました。

最後に、Fujitsu Uvanceは、ユニバーサル(あらゆるもの)とアドバンス(前進)を組み合わせた造語で、富士通がお客様と共に社会課題を解決し、共に前へ進んでいこうとの想いを込めたブランドであることが説明され、会員企業の皆様と一緒に、社会課題の解決に向けた大きな渦を作っていきたいとのメッセージで締め括られました。



Fujitsu Uvanceを通じて社会課題解決に取り組むうえで、「Planet(地球環境問題の解決)」「Prosperity: デジタル社会の発展」「People:人々のウェルビーイングの向上」を重点テーマとしている。

パネルディスカッション

Panelist



静岡県庁  
デジタル戦略局 参事  
**杉本 直也** 氏

Panelist



国立大学法人静岡大学  
サステナビリティセンター  
センター長  
**堂園 俊彦** 氏

Panelist



富士通株式会社  
Japanリージョン  
ソリューショントランス  
フォーメーション本部長  
**古濱 淑子**

Moderator



静岡放送株式会社  
報道制作局 報道部  
専任部長  
**岩崎 大輔** 氏

地域と共に創り上げる未来

パネルディスカッションでは、報道界で地域防災を専門に活躍されてきた岩崎氏の司会のもと、静岡を舞台にした産官学それぞれの取り組みが紹介されました。

まず、県のデジタル戦略を牽引する杉本氏から、ビッグデータ利活用の先進事例として、3次元の点群データを使った「バーチャル静岡構想」が紹介されました。上空のセスナや道路を走る車などから取得した膨大なデータを集約し、県全体をバーチャル空間に再現したものです。このバーチャル静岡をオープンデータとして公開することで、防災対策や次世代交通など幅広い分野で成果が出始めています。

続けて静岡大学の堂園氏から、持続可能な社会づくりに向けた活動が紹介されました。学内におけるSDGs活動の情報を整理・発信する「サステナビリティセンター」、産官学連携による「カーボンニュートラルワーキンググループ」、社会課題の解決に貢献できる人材育成を目指す新学部「グローバル共創科学部」、大学の知と社会をつなぐ窓口となる「イノベーション社会推進連携機構」などにより、地域社会とのさらなる連携強化が期待されます。



そして富士通の古濱から、全国13地域に展開するDXプロデューサーの取り組みについて紹介。北海道神恵内村や高知県黒潮町などを例に、富士通のDX人材が地域に溶け込みながら課題解決に取り組んでいる姿が報告されました。また、脱炭素に向けた国民運動を牽引すべく、富士通発祥の地である川崎での環境活動を積極的に発信していることも紹介されました。

最後に岩崎氏より、メディアという立場から、地域の課題や、その解決に向けた行政、大学、企業の取り組みを積極的に発信していくことで、より良い地域社会を作っていきたいとの決意が語られ、締め括られました。

開催支部挨拶



東海支部 支部長  
株式会社静岡新聞社・  
静岡放送株式会社  
執行役員 経営戦略局長  
**風間 隆男**

次回開催支部挨拶



北海道支部 支部長  
株式会社北海道新聞社  
執行役員 制作局長  
**村上 孝志**

風間氏より大会旗の交換を受けた村上氏は、ファミリー会60周年という節目に開催地となることへの感慨を語るとともに、広い北海道の魅力を存分に楽しめるよう、余裕ある日程での参加を呼びかけました。

## 特別講演 | 井沢流でひも解く家康像から、日本の来し方を知り、未来を展望する



作家、歴史研究家

井沢 元彦 氏

## Profile

1954年2月1日名古屋市生まれ。早稲田大学法学部卒。TBSに入社し報道記者として活動。第26回江戸川乱歩賞を受賞し31歳で退社、歴史ノンフィクションに独自の境地を開拓した。主な著書に、『逆説の日本史1～27』『日本史真髓』(小学館刊)、『英傑の日本史』(角川書店刊)がある。

YouTubeでは、『井沢元彦の逆説チャンネル』で常に歴史問題を発信しており、ネットニュース番組『ニュース・オプエド』のキャスターも務めている。



◀井沢元彦の  
逆説チャンネル

## 家康が変えた日本

人質として幼少期を過ごし、幾多の困難に瀕しながらも天下人にまで昇りつめた徳川家康。その人物像に迫りながら、家康がその後の日本をどう変えたのか、最新の知見、現代史にも触れながら解き明かします。

## 歴史家ならではの俯瞰的な視点で捉えた家康像

ただいま、私のことを「歴史研究家」と紹介いただきましたが、最近では「研究」を取って「歴史家」、英語にすると「ヒストリアン」と名乗っています。

よく「歴史家と歴史学者はどう違うのか?」という質問を受けます。歴史学者は、それぞれ自身の専門分野を持っていますが、例えば「鎌倉時代の専門家」といった大きな括りではなく、鎌倉時代の政治、あるいは経済、あるいは文化の専門家というように、非常に細分化されています。決して悪口を言うつもりはありませんが、専門分野だけに集中して研究するため、どうしても広い視野で物事を捉えるのが難しくがちです。これに対して歴史家は、歴史的な事件や人物について、日本史全体から見る、あるいは世界史も含めて見るなど、より俯瞰的な視点で捉えることがで

きるのです。

そうした歴史家ならではの視点で徳川家康という偉人を捉えたとき、これまであまり気付かれていなかったけれど、その後の日本に非常に大きな影響を与えていたことがあります。それは「日本の女性を弱くした」ということです。

日本史を通して見ればわかる  
実は強かった日本の女性

昨今、国際社会からも批判されているように、残念ながら日本は先進国の中でも女性の社会進出が遅れています。皆さんは「昔からそうだった」と思われているかもしれませんが、実際に歴史を振り返ってみれば、決してそうではなかったことがわかります。

中国の歴史書に初めて登場する日本人は邪馬台国の女王・卑弥呼です。天皇家も天照大神という女神の子孫とされていますし、聖徳太子の叔母にあたる推古天皇をはじめ、

古代には女帝の即位も少なくありませんでした。ちなみに、中国で初めて女帝が誕生したのは唐の時代の則天武后（そくてんぶこう）、武則天で推古天皇よりもずっと後の時代のこと。しかも、長い中国史上で唯一の例です。その意味では、日本は東アジアでも飛びぬけて女性が強い国だったと言えるでしょう。

家康が活躍した戦国時代はどうかと言うと、やはり女性が強かったことが資料からも証明されています。当時、ポルトガルから来日していた宣教師、ルイス・フロイスがこんな記録を残しています。「日本では夫婦各々が財産を所有し、時には妻が夫に貸し付ける」「日本ではしばしば妻の方から夫を離縁する」「日本の妻や娘は俗世から隔離されることなく、自由に行きたい所へ行く」など、西洋に比べて非常に強い女性の姿に驚いています。

ところが、戦国時代が終わって家康が江戸幕府を開くと、この状況が一変します。時代劇などで見られるように、夫は一筆書けば妻を離縁できるのに、女性はいかに夫が横暴でも耐えるしかなく、駆け込み寺くらいしか逃げ場はありません。少し時代が下っただけで、女性の立場がこうも変わってしまった理由はどこにあるのでしょうか。私はズバリ言って、家康が恐妻家だったためだと考えています。

## 大河ドラマとは異なる、 家康と正妻・瀬名との関係

今回の大河ドラマでは、家康と正妻である瀬名さんとの恋物語が描かれていました。私も小説を書いていたので、「これまでと違うものを書きたい」という脚本家の気持ちはよくわかります。ドラマや小説はフィクションですから、おもしろければ「嘘」が許される面もあります。とはいえ、あれほど2人が仲睦まじかったとは考えづらいというのが

本音です。

家康は、本来なら三河の国の殿様なのに、大国・駿河を治める今川義元の人質となり、幼少期から顎で使われ続けて育ちました。成長した後、今川家の重臣の娘であった瀬名さんを正妻に迎えたわけですが、義元の姪にあたる瀬名さんからすれば「わざわざ嫁に来てあげたのよ」くらいの気持ちがあったかもしれません。

ところが、義元が織田信長に敗れると、家康は即座に信長と同盟を結び、義元の「元」の字をもらった「元康」から改名しているわけですから、いかに今川家を恨んでいたかが想像できます。その結果、今川家に残されていた瀬名さんは「裏切り者の嫁」として幼子もろとも処刑されかけ、両親は自害に追い込まれました。たまたま助かったとはいえ、「自殺しにしようとした」と家康を恨んだのではないのでしょうか。

そう考えると、その後、家康の領土が広がって本拠を岡崎から浜松に移した際、岡崎に瀬名さんを置き去りにしたのも納得がいきます。家康にすれば、煙たい存在を遠ざけたわけですが、その結果、瀬名さんは岡崎に侵入した敵方のスパイと共謀。そうした内紛が信長にも伝わったことで、悲劇的な結末を迎えたわけです。

よほど懲りたのか、家康はその後、豊臣秀吉の妹を強引に押し付けられるまで、正妻を持つともしませんでした。これは後継を定めることが重要な当時の武家の当主としては、あり得ないことです。

家康が懲りたのは、瀬名さんだけではありません。一度は天下に君臨した豊臣家が、関ヶ原の合戦から大坂の陣を経て跡形もなく滅んでしまったのは、秀頼の母親として権勢をふるった淀殿の責任。家康の眼にはそう映ったはず。だからこそ、後に江戸幕府を開いた際に、江戸城内に

男子禁制の「大奥」を設けたのです。

海外には中東のハーレムや中国の後宮などの例がありますが、女性が強かった日本では、家康以前には見られなかったものです。ただし、海外とは少し性格が異なり、女性を独り占めするのではなく、女性を政治に関わらせないことが目的であり、そこから女性の政治力が弱くなっていったと考えられます。

## 戦国時代を終わらせたモラルが 男尊女卑の社会を生んだ

家康が女性を弱くしたもう1つの理由も、やはり先達からの教訓によるものです。天下人に近づいた織田信長が、自ら引き立てた明智光秀に殺され、その光秀を討った秀吉は、大恩ある織田家から天下を奪いました。そんな弱肉強食の繰り返しを目の当たりにしてきた家康は、「なんてモラルのない国だろう」と嘆いたことでしょう。これほど恩知らずばかりが出てくるようでは、ようやくつかんだ徳川家の天下も決して安泰ではない。そうした危機感のもと、モラルある社会を確立するために取り入れたのが、中国の儒教でした。

儒教というのは、ごく簡単に言えば、目上の人を敬うことを重んじる思想ですから、配下が主君に反乱を企てるような下剋上の時代を終わらせるには最適な思想だと考えたのででしょう。そこで家康は儒学者をブレーンに登用し、武家の子弟に幼少期から学ばせるなど、その普及に努めました。ただし、儒教は中国の思想だけに、男尊女卑も徹底していました。そこも含めて日本中に浸透してしまったため、言わば副作用として、女性が弱い社会に変わってしまったのです。

ここで見逃せないのが、儒教というモラルで戦国時代を

終わらせることができたのも、秀吉の失政、つまり朝鮮出兵の失敗があったおかげだということです。ただし、それは秀吉が愚かだったという意味ではありません。よく言われるような「独裁者の暴走」でもなければ、「最初の子供を亡くした悲しみを紛らわすため」といった個人的な理由でもありません。

決して海外侵略を肯定するわけではありませんが、国内を統一した支配者が、次に国外へと兵を向けるのは、世界的に見れば常識です。アレクサンドロス大王もチンギスハーンもナポレオンも、皆同じことをしました。なぜなら、兵士たちが納得しないからです。「日本は平和になって、もう君たちの仕事はないから全員解雇」と言ったら、それこそ大反乱が起こります。これにより、秀吉は朝鮮に兵を送り、それが悲惨な結果に終わったことで、兵士たちの間にも「もう戦はこりごり、今の身分のままでいいから穏やかに暮らしたい」という機運が広がりました。そうした下地がなければ、いくら家康が頑張っても、儒教も広がらず、徳川を頂点とした身分社会は確立しなかったことでしょう。

## 自らを天皇家と並ぶ「神」に 家康最後の挑戦

戦争のない安定した社会をつくるための家康の取り組みはほかにもあります。中でも特筆すべきなのが自己神格化。徳川家の権威を、日本を治める神の一族・天皇家を超えるまでに高めるべく、自らを神にしようとしたのです。

実は、これは先輩である織田信長もやろうとしたことですが、その途上で討たれてしまいました。家康は信長の近くで、自分の政権を永続させるには自己神格化が必要だということを学んだのでしょう。日本は天皇が治める国ですが、なぜ天皇が偉いのかと言うと、天照大神という神様の

子孫だからです。論理的に考えれば、その上に行くためには、自分が神になるしかないわけです。

そこで家康は、自らの死後、「東照大権現(とうしょうだいごんげん)」という名の神様に祀り上げます。権現とは、人間の姿になって地上に降りてくる神様のことで、地上で民を救い、人間としての寿命を終えると、また天界に帰って行きます。家康のブレーンだった天海僧正は、「家康は乱世を終わらせるために地上に表れた権現様だった」との理論付けを行い、家康の死後、日光東照宮に祀ります。現在も多くの人が参拝に訪れているように、家康は神になることに成功したわけです。

「神である家康の子孫・徳川家は天皇家と同等」という家康の意図は、ほかにも随所に表れています。例えば、「東照=アズマテラス」という名前が、天皇家の先祖である天照大神との対比であることは明らかです。また、江戸と京都を結ぶ東海道を整備し、五十三次と呼ばれる宿場を設けましたが、この数字は華厳経に由来します。つまり、この世からあの世に行くまでの53の宿ということで、幕府のある江戸を現世、天皇家の住む京都を過去と位置づけ、言わば天皇家を過去に封じ込めようとしたわけです。

これだけ自身の神格化を徹底したことで、徳川家はその後約300年にわたり戦争のない社会を実現します。これは家康の大きな功績と言えるでしょう。

## 歴史を流れて捉えるための 新たな視点を養ってほしい

今回、述べたことは日本史の教科書には載っていませんし、昔は歴史学者の先生方から相手にされなかったこともあり。冒頭で述べたように、専門家というものは自身の専門分野しか見ようとしないので、教科書も時代ごと、分野ごとの記述になりがちで、歴史の流れというものがかなか頭に入ってきません。

私は『逆説の日本史』というシリーズを27巻以上も書き続けており、最近では入門編に最適なコミック版も出ています。これらをお読みいただければ、今までバラバラに教えられてきたことが全部つながってきて、歴史の流れというものはどういうものか、より具体的にイメージできるはずです。本日の講演が、皆さんに歴史を俯瞰で捉える視点を持っていただくきっかけになれば幸いです。

## ワークショップ

## 6つのテーマで開催された各セッションのレビューをご紹介します

## Theme : 最先端テクノロジー情報の提供

人工知能の現状と将来の展望  
ー生成AIは何をもたらすのかー

## Lecturer

○○○○○○○○○○

富士通株式会社  
技術戦略本部  
SME推進統括部  
シニアディレクター

松本 安英

## Overview

生成AIの登場と急速な発展により、AIは第4次ブームに入ろうとしています。生成AIの動向、大規模言語モデル(LLM)の活用、富士通のAIプラットフォームの取り組みなど、ビジネスに役立つ生成AIの最新情報を紹介しました。

## Review

AIの概略から最近話題の生成AIや富士通の最新の取り組みまで、AIに関する基礎知識を広く網羅的に紹介いただきました。

取り上げられたテーマの中では、「生成AIは上流工程の業務を変革し、ホワイトカラー層への影響が大きい」という内容が最も納得できました。今後、生成AIがさらに進化すれば、戦略的意思決定など、経営の仕事もAIに代替されるようになるかもしれないと感じました。また、スーパーコンピュータ富岳の活用では「1023 FLOPSの計算量の学習で創発性を観測」という報告が非常に興味深く、シンギュラリティに一步近づいたかも、という感想を持ちました。

全体的に広く浅くという内容だったため、もう少し講演時間が長いとさらに深く理解できたかもしれないと感じました。

編集委員 株式会社エムエムインターナショナル 山宿 信也

## Theme : みらでぎ秋季大会 若手交流会

異業種若手同士で考える  
私たちの未来の選択

## Facilitator

○○○○○○○○○○

株式会社富士通ラーニングメディア  
ナレッジサービス事業本部  
マネージャー  
組織カルチャー変革パートナー

城能 雅也

## Overview

自身の未来にはどんな選択が待っているのか。今話題のChatAIに未来のヒントを聞きながら、異業種若手社員同士が多様な視点で対話することで、自らのキャリア形成に向けた思い・価値観を引き出し、行動変容のきっかけに。

## Review

本ワークショップの目的は、普段、交流や対話の機会が少ない異業種の若手社員同士が横のつながりを持ち、他者からの刺激や新しい視点、考え方などを取り入れることです。

4名ずつ4つのテーブルに分かれた参加者たちは、「私たちのターニングポイント」「未来に訪れるターニングポイント」「私たちのキャリアとは」の3テーマで、ChatAIへの質問を交えながら、セッションと対話を繰り返しました。初めは初対面同士でぎこちなかった対話が、次第に活性化し、互いについて理解を深めるのはもちろん、今まで無自覚だった自身の価値観にも気付くなど、発見に満ちた時間を過ごしました。ここでの気付きや体験が、今後のキャリア開発に向けた貴重なヒントとなることが期待されます。

ファミリー会事務局

## Theme : 経営層交流会

## 企業価値向上と人的資本経営



## Lecturer

○○○○○○○○○○

富士通株式会社  
CEO室 Co-Head

西 恵一郎

## Overview

労働人口の減少、労働市場の流動化をきっかけに、企業の人材への向き合い方は大きく変化しています。人と組織の観点から、人材から選ばれる会社になるための取り組みと、企業価値向上に向けた取り組みを紹介しました。

## Review

ファミリー会のあるべき姿の議論の中で、若手から経営層までが様々なレベルでコミュニティを形成し、それぞれの課題解決に取り組む活動をするという方向性が打ち出されています。本セッションでは、経営課題解決のコミュニティ活動を模擬体験できました。

人的資本経営は、「人材を「資本」として捉え、その価値を最大限に引き出すことで、中長期的な企業価値向上につなげる経営」です。富士通では「人的資本価値向上モデル」というフレームを基に検討プロセスを定義し、企業変革を実践していると西氏から紹介されました。ワークショップではこのフレームワークの一部を体験することができ、さらに深掘りしていきたいと感じました。

編集委員 日本通運株式会社 大林 孝至

## ワークショップ

## 6つのテーマで開催された各セッションのレビューをご紹介

## Theme : 働き方改革

WorkとLifeを豊かにする未来の働き方×AI  
ーテクノロジーが生み出す新しい価値とはーLecturer  
\*\*\*\*\*富士通株式会社  
シニアエバンジェリスト

松本 国一

## Overview

「働き方改革」の課題解決に向けて、テクノロジーが生む新しい価値への期待感が高まっています。本ワークショップでは、新たな視点として「AI」をキーに、参加者同士が「未来の働き方」を描き、実現に向けたアイデアやヒントを共有しました。

## Review

本ワークショップでは、様々なシーンでAIに任せたいと思えるカードを直感で各自3枚ずつ選択し、AIがどのくらいの時間手伝ってくれそうか、またそれにより空いた時間を何に使いたいかをグループごとに話し合い、発表しました。

AIに任せたいこととしては、仕事の効率化や健康、趣味などが、また、それにより空いた時間の活用法としては、家族との時間や自己研鑽など、どんなに技術が発達しても自分自身（人間）でなければ務まらないことが挙げられました。

今後もAIが発達する中で、AIと人間、互いの得手不得手を理解しながら、シフトできる部分はAIに任せ、自分にしかできないことには大いに時間を使うという見極めが必要になってくると感じました。

編集委員 株式会社ITAGE 長嶺 博美

## Theme : 地域貢献、経営・文化講座

## 感動をお渡しするために

Lecturer  
\*\*\*\*\*はままつ  
フラワーパーク理事長  
樹木医

塚本 こなみ 氏

## Overview

来場者数の低迷が続き、閉鎖の危機にあった「はままつフラワーパーク」の業績をV字回復させた塚本氏。パークが担う地域活性化の視点などにも触れながら、人々が感動で震える美しいパークづくりへの飽くなき挑戦が語られました。

## Review

藤シーズンに足利フラワーパークを訪ねて、その素晴らしさに言葉を失った経験があります。その足利フラワーパークの藤棚を作り上げた塚本氏も、はままつフラワーパークも、全く知らなかった私ですが、「浜松で理事長が手がけた場所はどんなに素敵な空間だろう」とぐいぐい引き込まれました。

「まあまあ綺麗なだけでは駄目、本当に綺麗と思ってもらえる「感動」をお渡しする」ことを常に考え、絵画のような「映える」空間の提供に手間を惜しまず、時には私財まで投じる。こうと決めたら行政も動かすバイタリティと信念。理事長就任時に公園にすればと言われていたはままつフラワーパークを再生された塚本氏の言葉は、穏やかな語り口の中にも熱い思いに満ちていて、あっという間の1時間でした。

編集委員 FITEC株式会社 星 さゆり

## Theme : LS研究委員会 研究成果報告

Leading-edge Systems 最優秀研究賞  
「業務サービスの正常稼働担保に関する  
方法論の研究」清水建設株式会社  
デジタル戦略推進室  
情報システム部

遠藤 樹 (右)

三菱食品株式会社  
情報システム本部

榎嶋 遼平 (左)

## Overview

最優秀研究賞、独創的研究賞をダブル受賞した研究成果を報告。クラウドサービス、特にSaaSの監視項目としてSNSの投稿遷移に着目し、障害の早期検知、障害時の業務時間損失の軽減を実現する施策のポイントを発表しました。

## Review

クラウドに移行した企業内システムの運用管理は、多くの企業に共通する課題です。クラウドサービスに障害が発生した場合、原因究明や復旧作業はサービス事業者に委ねることになるため、企業内の運用管理者にとっては、社内ユーザーへの障害通知のタイミングが難しく、結果として時間損失を増大させる懸念があります。

本研究では、障害発生時の早期対応を可能にする監視項目として、社内ではヘルプデスクへの問合せ、社外ではSNSに着目。両者を監視・照合して早期に障害を通知することで、ユーザーは代替システムに切り替えて業務を継続でき、運用管理者の負荷を削減できることが証明されました。

※本研究の詳細は会報Family411号に掲載されています。

ファミリ会事務局



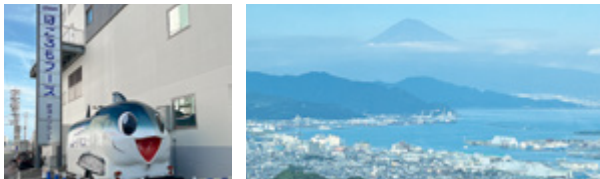
## プログラム 1

## はごろもフーズ様と世界遺産見学コース

はごろもフーズ新清水プラント

日本平夢テラス

世界遺産 三保の松原



## Review

はごろもフーズ様の工場では、5重6重の安全管理で安全・安心を究極まで追求する缶詰の生産工程を見学しました。

小学生をターゲットにしたというプロジェクションマッピングによる生産工程の案内がとてもわかりやすく、多くの工程が必要な缶詰製造の全体像が容易にイメージできるように工夫されていました。

1ラインあたり1分間に200缶以上が作られる超高速の生産工程は、センサー等の先端技術と人間の力が非常にうまく組み合わせられており、スピードと安全性が確立されています。作業服もすべてICタグで管理され、工場外へ持ち出しができなくなっているなど、外部から細菌等が入り込むことを徹底的に排除する仕組みも印象的でした。

また、IoTとFujitsu Intelligent Dashboardを組み合わせて、全工程の稼働状況を画面で可視化し、各工程の詳細画面にワンクリックでドリルダウンできるなど、効率的な管理を実現していることが印象に残りました。

昼食後、日本平では見えていた富士山が、三保の松原では雲の中に隠れてしまったのが、残念でした。

編集委員 株式会社エムエムインターナショナル 山宿 信也

## プログラム 2

## 浜松 感動ミニセミナーと体験コース

はままつフラワーパーク

航空自衛隊浜松広報館エアパーク

うなぎパイファクトリー



## Review

最初の訪問地は、前日塚本理事長のセミナーに参加しワクワクが倍増した「はままつフラワーパーク」。理事長のミニセミナーを皮切りに、理事長と職員のガイドで温室とローズガーデン見学、噴水ショーや散策など、時間が許す限り堪能し、桜、チューリップ、藤のベストシーズンに開催される「浜名湖花博（2024年3月23日より）」に合わせ再訪したいと思いつつパークを後にしました。

昼食は「浜松と言えば鰻」とうなぎに舌鼓。午後の見学は浜松城前を通過しながら「航空自衛隊浜松広報エアパーク」を訪問。ブルーインパルスや歴代航空機の展示だけでなく、映像シアターやコックピットへの搭乗、VRシミュレータでのミッション参加など、様々なコンテンツで楽しみました。そして最後は「うなぎパイファクトリー」へ。バスガイドさんからの事前情報提供のおかげで、短時間ながら効率よく回ることができました。うなぎパイナッツは完売でしたが、ナッツ入りのうなぎパイジェラートが食べられて満足。

出張では何度も訪れたことがある浜松ですが、浜松再発見となった楽しい1日でした。

編集委員 FITEC株式会社 星 さゆり

## プログラム 3

## 今話題の徳川家康 歴史をたどるコース

どうする家康 静岡大河ドラマ館

久能山東照宮

駿府城公園

静岡浅間神社



## Review

2023年の大河ドラマ「どうする家康」。主人公の徳川家康が人生の1/3を過ごし、非常に愛した町と言われている静岡で、歴史をたどるコースに参加しました。

最初に「静岡浅間神社」とその敷地内の「どうする家康 静岡大河ドラマ館」へ。ドラマ館では、登場人物の等身大パネルや相関図、衣装の展示や松本潤さんからのメッセージを拝見。その後、日本平ロープウェイに乗って、家康公が祀られている「久能山東照宮」を参拝しました。本殿や拝殿は権現造りで、非常に色鮮やかで美しく、また博物館では洋時計をはじめ貴重なものが数多く展示されていました。

昼食後は再び静岡市街に戻り、「駿府城公園」を見学。市民の憩いの場になっているという広大な公園で、坤櫓（ひつじさるやぐら）や紅葉山庭園などの見どころを散策しました。

静岡は温暖な気候で（11月でも汗ばむ陽気でした）、風光明媚な場所が多く、家康が静岡を愛したというのも納得できると感じました。実は、私自身は今年の大河ドラマを見ていなかったのですが、改めて1話から見てみようと感じるくらい、魅力的なコースでした。

編集委員 株式会社ITAGE 長嶺 博実